

〔暁タウルアの星〕と〔ほろホラチ酔タい女〕

石崎 卓

コンパクト・シリーズ 28

〔タ
ウ
ル
ア暁の星〕と〔ホ
ラ
チ
ダほろ酔い女〕

石崎 卓

朝日新聞社

いしざき たく
石崎 卓 1941年(昭和16)兵庫県
西宮市に生れた。神奈川県立湘南
高校を経て、学習院大学政経学部
経済学科在学中。
現住所 横浜市保土ヶ谷区保土ヶ
谷町3の181

タウルア
「**暁の星**」と「**ほろ酔い女**」
ボラチタ

定 価 230円

昭和38年7月20日発行

著 者 石崎 卓

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 東京 北九州
大 阪 名古屋 朝日新聞社

目次

ミラー氏の出現……………1

年の暮れの出港準備……………10

出発そして嵐……………20

沖縄の島影……………34

香港入港……………54

ふたたび南下……………69

シンガポールの街……………84

世界旅行の人たち……………100

「^{タウルア}暁の星」号と別れる……………118

マレー半島東岸を北上……………127

囚人の島、コンドル島……………149

猛暑とたたかいながら……………161

中共軍につかまる……………174

放浪の旅終る……………191

あとがき

ミラー氏の出現

英字新聞の 文字通り、私が浪にもてあそばれて「放浪」したあげく、やっと港へついたとき、い
広告欄から やむしろ、帰国してからといった方が、ぴったりかもしれないが、

「あなたが日本を出かけた時の動機は、一体何ですか？」

とよく聞かれたものだ。そこでいざ返事をしようとすると、ぐつと言葉が喉につかえてしまうので
ある。やむをえず、

「私は学習院大学でヨット部に入ってるんですよ。それで、ある日、英字新聞を見ていたら、ヨッ
トの乗組員を求むという変わった広告を見つけたんです。申し込んで見たら採用になっちゃったんで
すよ」

と答えることにした。すると相手の人は決って、「へえ何だそれだけか」という風な、がっかりし
たような顔をする。でも実際それだけなんだから仕方がない。もしも、

「私は大学でヨット部員ですが、ふだん乗っている小さいヨットでは飽き足らず、いつかはこの狭
苦しい日本を抜け出して、大きい外洋クルーザーに乗って外国旅行を企ててやろうと、その機会を

虎視たんたとねらっていたんです。そしたら、ある日フランスへ行こうというヨットがあるという話を聞いたんです。願ってもないチャンスなのでさっそく連れて行ってもらえないかと頼みこんだんです」

とても答えれば相手の人は満足してくれるかも知れない。しかし、それでは嘘になってしまう。私は学校のヨット部で行うディングー級やスナイプ級という極く一般の夏の海水浴場で見られる一枚帆や、前に小さなセールをつけた二枚帆のヨットの練習だけで精一杯だったし、それ以上大きいヨットで、しかも外洋旅行に出かけてやろう、なんて大それた勇氣も野心もなかった。

また正直に言つて、世界地図を拡げてとくと見入ったことのない私にとつて、自分が生れてからこの方二十年間も住みついている国が、それほど小さくて狭苦しいと思つたこともなかった。だいち、私はいまだかつて西は故郷の広島、北は修学旅行で行つたことのある仙台までしかいつたことがないので、北海道や九州が途方もなく遠い所に思えて仕方がないほどであった。だから正直な話、ヨットに乗つてフランスまで行くことになるかも知れないぞという可能性が濃くなつて来たとき、

「こりゃひよつとしたらひよつとするぞ」

と心配で心配で夜もろくろく寝られなかつたくらいであった。

昭和三十六年十二月に入つて間もないころ、私が見つけた英字新聞の求人広告の欄に出ていた広告は、三行くらいの目立たないものだった。

「マルセイユまで約六カ月間の帆走、経験は問わず。電話××××」

さっそく電話をかけると、日本人が出てきて、明日の六時ごろ、帝国ホテルのロビーに来てくれと言った。ロビーには背の低いずんぐりした男が黒いカバンを持って立っているはずで、名前は、ミスター・ミラーという人だそうだ。ちょうどうまい具合にその日は暇だったので、友達になるのも英語の勉強になる、彼のヨットを見せてもらうだけでもいいじゃないかという気楽な気持ちで、ミラー氏なる人に会ってみることにした。

ペリー・メイスン 帝国ホテルのロビーに定刻に現われたミラー氏は、今まで一度も会ったことがのようなミラー氏 なくても、何となく彼だなと解った。くしゃくしゃの紺色の背広を着て背が低いくせにおそろしくがんにような体格の持主だ。髪はロマンズグレーというやつで、テレビのペリー・メイスンのようなギョロツとした目つきをしている。人の良さそうな感じがするが、どこか大海を相手に荒波と闘う豪快で、しかも周密な海の男といった感じがする人だった。

英会話の時間をほとんどYESと、NOだけでなんとかかんとか、ごまかしてきた程度の実力の私の英語は、日本語に直訳すると、こんな具合だったに違いない。

「ワタシの名前、タク・イシザキ。ワタシ新聞見ました。そして電話かけました。マルセイユへいきたい。大学で私ヨット部員、しかし大きいヨットの経験ない」

ミラー氏はきつと紳士に違いない。赤くなったり青くなったり、真冬だというのに汗をたらしながら、懸命にしゃべっている私のようすを見て、吹き出すようすもなく、なるべく聞きのがすまい

として、それこそペリー・メイスンの目付きで、じっと耳をかたむけたままだった。

私の話が済むと、今度は彼がべらべらと何事か言い始めた。あとはしめたものだ。

「オー・イエス」

とか何とか、適当に相づちを打っていればいい。話は半分もわからなかったが、家に帰ってから、じっくり考えてみると、大体こんなことだったようだ。

「給料は一月に五十ドル、日本を出てから西回りで行きたい。マルセイユまで約六カ月だが、なるべく早く出発したいと思っている。ほかに君の友達で行きたい人はいないか。もしあったら連れて来てくれ。採用の返事は後日するから……」

私は、そのころには、もう半分乗り気だった。

「ヨットでフランスへ行けるなんて、ちょっとボロイ話だぞ。こんな機会はめつたにありっこないんだからな。しかも、ただで外国を見て来れるなんて。しかし今から出かけると、学校の方は一年か二年、縁がなくなりそうだ。おやじやおふくろが何て言うかな。それに危険だって大いにあるぞ。途中で竜巻や恐竜にでも会って、死んじゃうのは、ごめんだからな」

私の話は学校のヨット部員やOBにどんどん拡がった。英語の通訳のつもりでいっしょにたびたび行ってもらった父も、ミラー氏と知り合いになった。父や母は案外乗り気で、学校一年くらいはさぼってもいいだろうと言ってくれた。けれど私の兄までいっしょに行きたいと言い出した時には内心少しばかりあわてたらしい。

メンバーは六、七人の候補者の中から、いつもひまをもてあまして、ぶらぶらしていた者が最後に残った。石井昌敏さんも等々力淳一さんも、ヨット部の先輩で、石井さんは、テレビ関係のオフィスに働いていて、在学中はヨット部のキャプテンをやっていた。ジュンさん（等々力さん）は、一年ずれてしまったので、当時四年生である。

石井さんは、いかにもスポーツマン・タイプの青年紳士。勤めている会社を棒に振っても行きたくないという熱心さを買われた。しかも、ヨット部のキャプテン時代に関東選手権に優勝したほどの技術の持主だ。婚約した彼女をどうにか口説いて、お熱いところを見せて、男やもめの私たちを太いにうらやましがらせていた。

ジュンさんの方は、ノンビリ型のちよつとした二枚目。二年間くらい、はき通しの半分力カトの抜けた靴を引にかけて、隙間風の吹き抜けるルノーを運転して、ぶらぶらしていた。

ところで三人にとって、共通の大きな悩みがあった。言わずと知れた英語の問題である。もう少し勉強しておけば良かったと、いまさらのように後悔した。ふだんは手まねや簡単な英語で用は足りるかも知れないが、大切な問題を話し合うハメになったら、両方ともチンプンカンプンではお手あげである。

しかし天は私たちを見すてなかった。その問題を解決すべく現われたのが、マコだった。彼女の本名は蜂須賀正子さん。元侯爵の娘で、小さい時からアメリカに留学していた彼女は、半分ヤンキーで、半分日本の女の子と言った感じで、英語でしゃべる方が話しやすいくらいなのである。美人

でチャーミングなマコは、素足にブルージーンをはいて、イキなつもりのダブダブのセーターを着て、何か失敗をやらかして頭をかいている私に向って言う。

「おお、ショック。タクベー、何してんだよ。このやろー」

タクベーは私の呼び名である。彼女のお母さんが、ミラー氏の親友なので、マコは私たちといっしょに船のゲストとして通訳をしながら香港まで乗り込むことになった。

これでメンバーはそろった。ところで、最初に紹介すべきだったかも知れない主役、——それは私たちの命をあずかることになるタウルア号とミラー氏である。彼女、つまりタウルア号はヨットの好きなものなら、一目見たとたん、思わず生ツバを飲み込みたくなるような美人、いやヨットだからシロモノとでも言うのだろうか。専門的に言うと、四十五フィート・ガブリグスクーナー、つまり全長が四十五フィート（約十五メートル）でマストが二本、前方に低いマストがあり、後方に高いマストがあつて、セールの型は三角形ではなく四角形のセールである、ということになる。

ダークブルー タウルア号の名付け親はもちろんミラー氏で、彼はタヒチの女の子に大いにもてた**のタウルア号** ことがあり、そのせいか、タヒチにすっかりほれこんでいて、自分のヨットにもタヒチ語の名前をつけたらしい。タウルアとは「暁の星」という意味だそうだ。彼女には実を言うと「タウルア・イティ」という子供がいる。せいぜい三人がやと乗れる小さいボートのことで、イティはチャイルド（子供）という意味である。

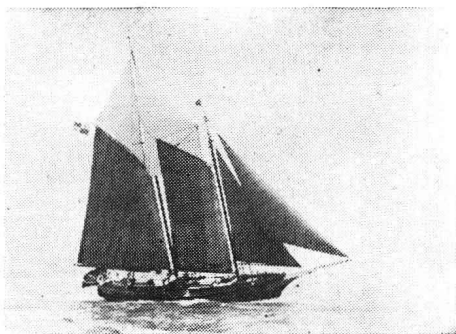
私がタウルアを見に行つたのは、帝国ホテルのロビーでミラー氏に面会してから、二、三日経つ

ところだったろうか。夕暮れ時の静かな芝浦埠頭の岸壁につながれて、ダークブルーの船体をゆったりと冷たい海面に横たえていた。彼女を初めて見たとたん、正直にいつて私は思わず尻込みしたくなった。こんなちっぽけなもので、嵐の吹きすさぶ東支那海や、大波が白い歯をむき出して待ち構えているサイクロン（熱帯性低気圧）でその名も高いインド洋や、人間の干物が出来てしまうほど暑くて、海図にも載っていない暗礁がいくつも待ちかまえているといわれる紅海の荒波を乗り越えていくなんて考えただけでも、気が遠くなる思いがしたからである。

しきりに心配している私たちにミラー氏は巧妙に説明してきかせた。

ヨットが海に浮んでいる状態は、ちょうど大海にピンポン玉が浮んでいると思えばいい。タウルア号がピンポンなら、一万トン級の大きな船はさしずめ、バケツか洗面器と言ったところだ。ピンポンはいくら波をかぶつても沈まないけれど、洗面器はすぐに沈んでしまう。しかもヨットにはキールと言うものがあつて船底よりずっと下の方に重りがつてあるので、床の上の起きあがりこぼしのようなもので、たとえヨットが大波にもまれて、九十度以上マストが海面に沈んで百三十度位になつてももとへもどる力があるという。うまいことを言うが、それでもしやれではないが大船に乗った気持でいるわけにはいかない。

タウルア号のブルーの船体には、金色の線が一本入っていてトランサム（船尾の平たいところ）に一羽のワシが二本の交差した矢を文字通りわしづかみにして、羽を拡げていて、その下に金の浮彫りで、TAURUAと書いてある。百年も昔の設計を再現しただけあつて、タウルア号は、人間



波をけて帆走するタウルア号

でいうなら中世の貴婦人といった感じであった。

総チークのヨットを造るなんてことは世界中のヨット乗りの生涯の夢である。何しろアメリカでは、一フィートのチーク材がなんと五ドルもするそうだから。辞典によると、この木材は緻密にして腐朽に耐え、船舶、建築、その他諸種の器用に供せられ、アジア第一の良材で東印度地方の原産だそうだ。品格のある光沢と金属のように硬く、海水に強い材質、ヨットに最も適しているとあった。

船室は至れ 船の後部には自動排水式の操舵席があり、舵輪りつくせり を前にして腰掛けると、すぐ前に大きなコンパス（羅針盤）が見えるようになっていた。後のハッチを開けると、ハシゴがあつて、サロンに下りられる。サロンには両側には赤いビロード張りのソファベッドがあつて、真中には、エンジンがあり、ふたをかぶせると、海図台になる。次の船室は食堂兼乗組員の船室で、三人が寝られるしくみになっていて、真中には折りたたみの食卓があつた。壁際には小型の石炭ストーブがあり、ステンレスの煙突はデッキに突き出ている。その船室とサロンの間に、前に向つて左側にトイレット・ルーム、右側にセールロッカー（帆を入れるロッカー）がある。

調理室（ギャレー）は食堂に隣接していて、右側にステンレスの流しと、飲料水と排水用のポンプ、調理台の下はロッカーになっていて、ごみを捨てるバケツがある。左側にはあげぶた式の冷蔵庫があつて、石油バーナーのコンロが二つ正面に並んでいた。一番前の船室は二つの寝台とチェンロッカー（鎖を入れるところ）になっている。どんなヨットでもそうだが、狭い空間をなるべく利用してやろうと、各船室にはロッカーと棚がやたらにある。そこには、私たちにはチンプンカンプンのヨットに関する本やフランス料理の本らしいものが所狭しと並んでいた。まずは至れりつくせりの準備である。

ステンレスの流しやポンプ、オースチンの四十馬力のガソリンエンジンは別として、なるべく文明を否定しようという考えのミラー氏は、自動操舵装置や無線電信、レーダー、方向探知機（ディレクションファインダー）の類は一切使わない方針だと言う。百年前の船乗りはそれで七つの海を渡ったのだから、現代の人間もできないわけがないというのだろう。おそろしいオヤジである。もしも暗礁に乗り上げでもしたら、一卷の終りじゃないかと心配そうな私たちに、ミラー氏は胸を張って味なことをいった。

「私は現在のところ男やもめだからタウルアを自分の妻のように思っているんだ。自分の可愛い妻を沈めたりしないから安心したまえ」

年の暮れの出港準備

パスポートと ミラー氏は私たちの出発の期日を選びにも選って一月元日に決めた。大体そんな外務省の係官 生死にかかわる大旅行をするには、半年か少なくとも三カ月くらいの準備期間が必要にちがいないと思つてのんきに構えていた私たちである。この決定はかなりのショックだった。赤道を境にして、北半球では九月ごろから四月ごろまで北東のモンスーン（季節風）が吹いていて、五月から九月ごろまでは南西のモンスーンが吹くことになっているので、日本からシンガポールに向う場合も、シンガポールから紅海の入口のアデンに向う場合も帆船で行く場合は、北東のモンスーンを利用しないとほとんど目的地に達することが出来ない。ミラー氏は香港でタウルア号をドックに入れるつもりなので、北東モンスーンの勢力が一番強い時期を逃がしては大変と、出発をなるべく早く、きりのいい一月の元日に決めたのだ。

外国へ出かけるにはなんでも、生命の保障になるべきパスポートとかいうものを持って行かなければならない。そいつをもらうのは、ほんとの話、銀行強盗の方がやさしいくらいで、役所通いをいやというほど度重ねてから、正当な理由ありと認められて後にやつともらえるものであるという

ことをかねてから聞いていた。そのパスポートやらを何処の役所に行けば発行してくれるのかも知らない私たちなのである。

「元旦まであと十五日くらいしかないんだぜ。出発出来るわけがないじゃないか。いったい何から準備すりゃいいんだろ」

南支那海の大嵐や、インド洋の荒波を乗りこえて行こうという決意に満ちた未来の海の男たちは、早くも陸上で最初の難関にぶつかり、寄り集って思案顔で相談した。私の兄が良い知恵を与えてくれた。

「何処かの飛行機会社の案内所へ行って聞いて来い。その人なら商売だから、きっと何でも知っているにきまつてるよ」

旅行案内所の人は、フランスまでヨットに乗って行くんだと張り切る私たちを、「ふざけた野郎が来やがった」とでも思ったのだろうか。適当にあしらっていたが、私たちの熱心さに少しは心を動かしてくれて、こまごまとどういうふうにすれば、パスポートをもらえるかという説明をしてくれた。メモ用紙に書き込まれたさまざまな条項を前にして私たちはまたもや不安に襲われたのである。

「一月一日に出発の予定なんですがね」

相手は、

「やっぱりふざけた野郎だった」